

Marigaux
PARIS

杉浦直基さん——国立音楽大学准教授

より艶やかになった音色、決まりやすい音程、表現のしやすさ、存在感……。マリゴなら100パーセントに近い満足感とともに演奏できる。

——マリゴの901を吹き始められたのはごく最近のことだと伺いました。

杉浦 ええ、新しい楽器は最近です。でも、マリゴは、大学1年の頃からずっと使っていたのですよ。ローター・コッホのレッスンを受けたときもマリゴでした。「お前のマリゴは俺のヤツよりいい」なんて言われて(笑)。ただ、当時から音程に不満があったのと、アクが強いつつ、少し融通が利かないような気がして、最近はずっと悩んでいました。

——それがなぜ？

杉浦 もともとマリゴは世界的にも定評があるメーカーなので、生徒に奨めることも多かったんです。現に、僕の生徒の多くは901

かM2を吹いています。ところが生徒の楽器選びにつきあっているうちに、最近のマリゴが随分良くなってきているなど感じて、自分でも使いたくなってしまっていて、昨年の秋に901を購入しました。

——以前不満だった部分は？

杉浦 見事に改善されてきています。その結果、もともと持っていた特長、たとえば、音の出しやすさ、音の太さ、響きの豊かさなどがより際立ってきた。個性を充分残しつつ、嫌みなアクが少なくなりました。どうやら、M2のような革新的な楽器を開発していく中で、901の設計も大幅に見直され改善されたようですね。

——マリゴは、昔から、プレイヤーの意見を取り入れ、常に進化してきた革新的なメーカーではあります。

杉浦 そうですね。でも、それが悪い方向に出ることもままあった。改善ではなく改悪だ、みたいな(笑)。今回は間違いなく改善でしたね(笑)。以前よりもコントロールしやすく、自分の思ったように反応してくれるのでとても気持ちがいいです。

——音色等はいかがですか。

杉浦 音色もより艶やかになりましたね。音程も決まりやすく、ダイナミックレンジが広いので表現しやすいつつ、以前はちょっと鈍かった小さな音の立ち上がりも全く問題ありません。音の密度が濃くなったので、合奏の中に入っても存在感が際立ちます。ソロはもちろん、オーケストラなどいろいろな場面で演奏しなればいけない私にとっては非常にありがたい。最近もいくつかの在京オーケストラの中で演奏させていただきましたが、まったく問題ありません。5月25日には木管五重奏のコンサートがオペラシティのリサイタルホールであるのですが、それも非常に楽しみです。

——悪い部分は見当たらないと？

杉浦 それは言い過ぎですが(笑)。どのメーカーにも長所や短所があり、それを比較検討して使う楽器を決める訳です。ここをどうあそこをあきらめよう、と。でも、今のマリゴであればあきらめなければいけない部分はほとんどありません。大概のことは大丈夫です。

——アマチュア、中高生にはいかがでしょう。

杉浦 リードの選択の幅が広いところは変わっていないので、どんなリードにも対応できます。発音しやすくなつて、音程も良くなっているので、安心してしっかりと演奏できると思います。吹奏感も重すぎないので、パワーがない人も豊かな響きが得られると思いますよ。

——マリゴと言えば、ダウインド・ウルター氏が来日し、国立音大でも吹かれるとか……。

杉浦 そうなんです。ダウインド・ウルター氏はマリゴを吹く名手のおひとりですが、7月2日に大学ホールで公開レッスンとミニコンサートをやつていただくことになっています。私も指導者として、学生たちには現代の名手たちに数多く触れてもらい、最先端をいく奏法を吸収してもらいたいと思つていまして。

——学生たちにはとてもいい機会になりますね。国立音大では、オーボエとファゴットだけの演奏会も毎年行われているのでは？

杉浦 今年は11月8日にルネ小平で開催します。大学所有のいろいろな特殊楽器も登場しますので、色彩豊かな演奏会になると思いますよ。国立音大としては、人間形成ということも含めて教育をしているものから、合奏やアンサンブルなどを通して、協調性のようなものを身に付けていてもらいたい。ですから、毎年秋におこなうオーボエとファゴットだけの演奏会もとても大切なものなんです。ここでもマリゴが主流となっているのですが、良く溶け合います。マリゴ独特の柔らかさと深さが表れています。そうしたアンサンブルを通して、技術はもちろん、人間性も磨いていってほしいですね。

——先生の教え子の中から素晴らしいプレイヤーが育つことを期待しています。

杉浦 ありがとうございます。ぜひそうやってほしいですね。僕も努力していきたいと思つています。



オーボエ奏者 杉浦 直基 (国立音楽大学准教授) (すぎうらなおき)
静岡県立静岡高等学校卒業。小畑善昭、似鳥健彦の両氏に師事した後、1980年国立音楽大学入学。丸山盛三氏に師事。在学中にヘルムート・ヴィンシャーマン、ギュンター・バッシン、ディートヘルム・ヨナス、インゴ・ゴリツキ、ハンスエルク・シェレンベルガーの各氏の指導を受ける。84年国立音楽大学卒業。在学中に東京交響楽団に入団、2006年3月まで首席奏者を務めた。1994年には渡独し、ローター・コッホ氏(元ベルリン・フィルハーモニー・ソロオーボエ奏者)に師事した。2006年4月より国立音楽大学准教授に就任。また、洗足学園音楽大学非常勤講師として後進の指導にあたっている。その後は日本の主要なオーケストラに客演首席奏者として幾度も招かれている他、室内楽奏者、ソリストとして、また日本音楽コンクール・オーボエ部門、管打楽器コンクール・オーボエ部門などの審査員を務めるなど多方面で活動している。なお室内楽グループ「クニタチ・フィルハーモニーカー・アンサンブル」のメンバーとしてCDがリリースされている。

コンサート情報

クニタチフィルハーモニーカーアンサンブル 第8回定期演奏会
(日時)2010年5月25日(火) 開場18:30 開演19:00
(会場)東京オペラシティ・リサイタルホール
(出演)立川和男(FI)、杉浦直基(Ob)、武田忠善(CI)、霧生吉秀(Fg)、井出詩朗(Hr)、小笠寺美樹(Pf)
(曲目)フランシス・ブーランク:クラリネットとファゴットのためのソナタ、ジークフリート・カーク=エラト:ユーゲント、フランツ・ダンツィ:ピアノ五重奏曲、平尾貴四男:木管五重奏曲、ルイーズ・ファランク:ピアノ六重奏曲 ハ短調 作品40
(料金)学生¥2,500 一般¥3,500(問合せ)TEL/FAX 03-5372-0068(小笠寺)